中日本版

各地の話題

暮らしの知恵学び合う

長野・農村生活マイスター協会
女性リーダーが交流会

上講話にのぞむ相澤さん（中央）、下一堂に集う農村生活マイスター

【長野】県農村生活マイスターのつどいが9月4、5日、小谷村の白馬アルプスホテルで開かれ、農村女性が講話を聞き、料理の試食、視察などを行って交流を深めた。

県知事からマイスターの認定を受けた農村女性リーダーでつくる県農村生活マイスター協会（会員742人）が主催し、会員94人が参加した。

研修では、「先輩マイスターのお話と交流」をテーマに、小谷村の相澤つたゑさんが「小谷村のくらし、漬物、山菜、加工などについて」を対話形式で講話したほか、地元産の食用ほおずき、ミニトマト、信州サーモン、紫米、赤ニンニクなどを使った料理を試食した。

2日目の視察では、道の駅小谷でマイスターの宮澤貴子さんが代表を務める「おたり娘の会」の蕎麦おやきの様子を視察。白馬村では白馬農場直営の「農かふぇ」でマイスターの津滝明子さんから6次産業化、直売所、学校給食への食材提供などの説明を受けた。

（北アルプス地区農業委員会協議会）

地域の食「思い切り楽しんで」

秋の収穫祭　今月27日開催

新潟・柏崎市

多くの客でにぎわう野菜直売所（昨年）

【新潟】柏崎市恒例の「かしわざき秋の収穫祭」が10月27日、文化会館アルフォーレ周辺で開かれる。地元の新鮮野菜やグルメが並び、約1万4千人（昨年）の来場者でにぎわう食の一大イベントが今年もやってくる。今年で7回目。

柏崎市やJAえちご中越などでつくる実行委員会が主催。農林水産物の直売所、市内飲食店による出店のほか、雑貨販売や「はたらく車」の展示など盛りだくさんの催しが予定されている。

昨年は、JAが新米や地場産野菜を販売。ネギ、大根、サトイモなどの売り場に来場者が集中した。柏崎産米の葉月みのり、米山プリンセス・シスター、新之助、こしいぶきのおむすび4種「食べ比べセット」やタマネギの詰め放題も注目を集めた。

実行委員会事務局では「住民が地域の食を思い切り楽しめる一日」になることを期待している。

（柏崎市農業委員会）

女性農委増に向け検討会

石川・金沢市農業委員会
年内に具体策提言へ

【石川】担い手への農地集積率向上と女性農業委員の増加をめざす金沢市農業委員会は、有識者と農業者からなる検討会を立ち上げた。年内に具体策を提言書にとりまとめてもらい、取り組みに生かしたい考えだ。

農業委員会が掲げる目標は、①担い手への農地集積率80％以上②農業委員に占める女性の割合30％以上で、2026年度（女性委員は26年7月の改選時）での達成をめざす。

1回目の検討会（今年8月）

検討会では、農業委員と農地利用最適化推進委員の活動、農業委員会の業務について、課題の解決に向けた意見を出し合い、今後の具体的な取り組みにつなげる。

8月に開いた1回目の検討会では「今後の農業委員会活動において女性の視点が重要」などの意見が出された。

今後、具体的方策を提言書にして、今年12月中に農業委員会会長が受け取ることとしている。

（金沢市農業委員会）

地元の安心・安全食品PR

兵庫・神戸県民センター

新鮮野菜などを求めてにぎわう新鮮市

庁舎で新鮮市、市民らでにぎわう

【兵庫】県神戸県民センターは、神戸産の新鮮な農産物や加工品を販売する「しんながた新鮮市」を新長田合同庁舎で毎月1回（基本第4水曜日）開催している。

兵庫県認証食品などの安心・安全な農産物を市街地の住民に知ってもらうのが目的で、JA兵庫六甲と連携し2022年から実施。来客者からは「毎回、新鮮市を楽しみにしている」と好評で、10月23日もナス、キュウリ、トマト、柿など旬の農産物やジャムなどの加工品が販売される。

県の担当者は「毎回多くの人にお越しいただき感謝している。生産者のこだわりが多く詰まった神戸産の農産物や加工品を食べて、元気と幸せをチャージしてほしい」と語る。

新鮮市に関する問い合わせは、神戸農林振興事務所農政振興課（☎078・742・8325）まで。

地域計画の「話し合い」進む

目標地図　農業委員が議論リード

京都・笠置町 農業委員会

目標地図について議論する笠置町切山地区の農業者（9月15日）

【京都】笠置町東部地区で「地域計画作成に向けた農業者の話し合い」が7月27日に開かれ、農業者15人が参加。9月15日には同町切山地区でも話し合いが行われ、農業者8人が参加した。

話し合いの場では農業委員が中心になり、目標地図を作成するため現況を確認しながら、将来の地域農業と農地の在り方について議論を交わした。

中山間地域のため狭小な条件不利農地が多く、高齢者の割合が50％を超える笠置町では、今後どう農地を守っていくかが町全体の課題だ。話し合いの参加者からは「高齢化で保全管理が精いっぱい」と苦悩する声が出る一方で、現在も営農している農業者から「耕作を続けたい」という力強い声も出るなど、熱心に検討が行われた。

今後、他の地区でも順次農業委員を中心に将来に向けた話し合いを進め、地域計画を年度内に策定する予定だ。

（笠置町農業委員会）

愛知・知立市　かきつ畑♪

「都市農業は有機で」

NPO法人が勉強会

【愛知】都市と農業が共生するまちづくりの実現をめざす知立市の「NPO法人かきつ畑♪」は9月20日、知立文化広場で都市型有機農業をテーマにした勉強会を開いた＝写真。消費地に近い都市農業を有機農法とすることで、消費者の信頼がより高まると期待されている。

参加者は、かきつ畑♪の体験農園や生産緑地にある圃場などを視察した後、北海道農業研究センター・池田成志上級研究員の「最先端の有機農業を知り、有機農業への転換について考える」と題する講義を受けた。池田さんは、有機農産物の身体への効能を説き、「長期保存や輸送には適さない面もあるため、消費者に近い都市部での生産に親和性がある」と話した。

かきつ畑♪では、都市と農村の共生に向けたイベントを今後も予定しており、子どもたちが農業に接するきっかけづくりをしていきたいとしている。

女性働く環境づくりを徹底

岐阜・高山市 アルプス農場

【岐阜】高山市上宝町でトマトやパプリカ、菌床しいたけなどを生産する㈱アルプス農場（大西洋介代表）は、労働環境整備や正社員登用など女性が働きやすい環境を作り、社員15人のうち女性14人が活躍している。

大西さんは「働き手が減る中山間地で人材確保をするには社員が働きやすい環境整備が必要」と5年前から取り組みを開始。能力に応じて昇給するよう、栽培技術や免許取得など段階ごとに時給単価が変わる人事評価制度を導入し、目標の見える化と共有により社員のモチベーション向上につながった。

また、女性の正社員登用をより進めるため、パートの意見を聞き、就業規則を見直し、家庭の都合に合わせ勤務時間を午前7時30分から午後5時の間で1時間単位で選べるようにした。これらの取り組みにより、新規募集することなく社員の紹介でママ友3人を正社員として雇用。同社が地域で評判となり求職者が集まり、現在では女性の正規社員は7人に増え、正規社員2人が執行役員へ昇進した。

大西さんは「良い環境を作ることで中山間地でも安定して従業員を確保できる。現在は厚生労働省の『えるぼし認定』申請に向けて整備している」と話す。

12月1日 Uターン就農相談フェア

和歌山県JAビルで

来場者（右）に情報提供を行う相談ブース（昨年のフェア）

【和歌山】県農林大学校就農支援センターと県は、市町、県農業会議などと共催して「Uターン就農相談フェア」を12月1日午前10時～午後3時、JR和歌山駅前の和歌山県JAビルで開く。

県内で就農を志す人や農業法人への就職を希望する人などを対象に、適切なアドバイスを行い、就農促進を図ることが目的。

当日は、県や市町、JAなどが出展する13のブースで個別相談を受けるほか、先輩の新規就農者から実践事例の発表が行われる。

県農林大学校就農支援センターの林俊孝主任は「来場者それぞれの質問に丁寧に応えていきたい」と話している。

相談の予約は、同センター（☎0738・23・3488）まで。